

京都大学	博士（文学）	氏名	李 弘喆
論文題目	『世本』佚文の史料學的研究 —漢唐經學における『世本』の認識・受容を中心に—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>『世本』は中国先秦史研究においては不可欠ともいえる重要な材料の一つである。『世本』原書はつとに散佚し、18世紀以降の清朝考証学者が伝世文献に引用された『世本』の佚文を丹念に集め、可能な限り復元を試みた。その作業を輯佚といい、現在利用されている『世本』は清代の輯佚本である。『世本』の成書年代及び作者に対する伝統的な関心はそのまま現代中国の研究者に継承されている。</p> <p>『世本』の内容が主に系譜であるという認識は長期にわたって、先秦史研究者の間に共有されてきた。従来の『世本』研究は主にこのような認識を前提として、先秦史の分野で行われてきた。後漢以降の書物にみえる佚文を『世本』原文の断片とみなし、佚文の記述形態を『世本』原文の固有の「形式」として、『史記』などの文献と比較することに特に関心が寄せられてきた。近年、データベースの進展によって、新しい佚文が次々と発見され、清朝考証学者の輯本を補充することも可能になった。記述形式を想定した上での再輯佚及び佚文形態研究は『世本』のみならず、輯本研究全体に大きな影響を与えた。</p> <p>しかし、このような『世本』佚文研究方法は引用に伴う原文の攪乱といった事態をほとんど考慮していない。それは、『世本』がいかなる書物として引用されてきたかといった『世本』受容の具体的推移が等閑に付されていたからである。『世本』は伝世していた数百年の間に様々な性格の異なる文献に引用された。そして『世本』の「使用痕」として残された佚文のほとんどは訓詁材料として後漢以降の注疏文に保存されたもので、『世本』の原文ではなく、訓詁学の注疏文の一部である。故に『世本』佚文のあり方はその引用先の情報提示の形式に制約されている。果たして『世本』は複数の引用先において、いかに使用されているのか、この問題を検討しない限り、佚文の記述形態に関連する議論は成立しえない。つまるところ、有効な『世本』佚文の史料学的検討は訓詁学体系における『世本』の受容状況の変遷をたどることにほかならない。</p> <p>本論文は、『世本』の文献としての役割を後漢時代から初唐に至るまでの学術史に位置付け、『世本』の受容実態を解明すると同時に、現存の輯本の史料学的性格を明らかにするものである。前漢末期より魏晋時代に至るまでの文献に確認される『世本』の絶対的用例数が少ないので、第一・二・三章では、『世本』佚文の分析とその受容背景である經学の発展を併せて検討し、複数の角度から『世本』に対する認識を手掛かりに『世本』の文献学的性格を考察する。南北朝時代以降の經学が五經正義に</p>			

集約されたため、『世本』佚文は五経正義に集中し、かつ一定の規則性がみえる。そのため、第四・五・六章では、経学の伝承を重視し、旧注疏がもたらした影響を意識した上で、「易・詩・書」・「三礼」・「三伝」併せて、「九経」の疏に確認される『世本』佚文の疏文における役割を確認し、考察の焦点を佚文のあり方に当てる。

まず序論では、これまでの『世本』研究を概観しつつ、『世本』研究の問題意識が長期にわたって輯佚以前の引用形態の考察に至らず、輯本を原書の断片とみなしてきたこと、また先秦史研究の中でなされてきた原文復元の試みは引用に伴う原文の攪乱といった事態をほとんど考慮しておらず、『世本』受容の具体的推移が等閑に付されていたことを指摘する。そして、輯佚研究は引用行為自体を研究対象として、原書の受容実態を解明すべきことを示した上で、原書の受容実態を解明することと佚文のあり方の検討とは表裏の関係にあるという新たな方法論的視点を提示する。

第一章「『世本』受容前史」は、前漢末期より後漢時代前半期に至るまでの漢代学術及び世系関係資料の実態を分析することを通じ、『世本』が本格的に文献に引用されるまでの学術的背景を解明する。文献としての『世本』テキストは前漢末期に劉向によって定着したが、後漢初期に至るまではごく一部の「博学」を好む人にしか知られていなかった。後漢初期において、訓詁学のかたちはいまだ整っておらず、当然『世本』を注釈・訓詁の材料として使用することはなかったことを論ずる。王符の『潜夫論』志氏姓には『世本』世系記載と同源の原資料が存在し、宋忠注が成立する前の『世本』世系記載の原貌がある程度反映されていることを指摘し、『世本』世系佚文の形態に対する全面的な分析の必要性を提示する。

第二章「後漢訓詁学における『世本』の受容」は、後漢時代の応劭・鄭玄・高誘が著した多様な注釈に用いられている『世本』佚文を蒐輯し、その傾向性を考察する。後漢時代における『世本』の引用は上古に集中しており、殷周及び春秋時代に関わる引用はみえず、世系や氏姓などの引用もまったく確認されない。訓詁学に用いられる『世本』佚文はほとんど上古の聖人・聖王制作の記述に集中し、後漢時代における讖緯思想の動きが看取されることを指摘する。また『漢書』応劭注に用いられることによって、『世本』の「史注」材料としての位置付けが成立し、その引用の拡大は「漢書学」の発展に関連することを論ずる。

第三章「『世本』宋忠注をめぐって」は、まず『世本』宋忠注とされる記述の整理作業を行い、「宋忠」、「宋衷」、「宋仲子」など輯本に見える複数の呼称の性格・成因を明らかにする。漢魏の交に成立した『世本』宋忠注と思われる宋忠の言説を分析し、宋忠の学問の特徴に基づき、『世本』の文献的性格を再考し、『世本』宋忠注成立の学術史における意義を解明する。後漢末期に宋忠が暦関係の書物を集め、春秋の暦を検討したことが『世本』宋忠注が成立するきっかけであったことを示し、宋忠が後漢末期の易学・左伝学に基づき、『世本』を説明しており、宋忠注の成立によって『世本』と左伝学との関係が強化されたことを指摘する。後に杜預が宋忠の学問の

影響を受け、それをきっかけに『世本』がはじめて春秋学の注釈材料として扱われるようになったことを論ずる。

第四章「『世本』世系佚文をめぐる考察—『詩』・『書』・『易』正義篇—」では、『周易正義』・『毛詩正義』・『尚書正義』に用いられる『世本』世系記載の疏文としての役割・あり方を逐一確認する。『周易正義』が『世本』を引用しない原因は、王弼注の『世本』への態度を踏襲したことにあることを指摘する。『毛詩正義』にみえる『世本』世系記載の引用・言及例を分析した上で、『世本』の世系記載の不規則性を指摘し、疏文は説明の便宜上、必要な世系情報を集約した上で提示していることを明らかにする。さらに、『尚書正義』に利用される『世本』の上古関係の世系情報は主に或論として否定される傾向が見える。その主な原因は『尚書正義』がその依拠した偽孔伝の立場を継承したことにあると考えられ論者が指摘した『世本』と緯書との間に存在する共通点を裏付けることを論ずる。その上で、『尚書正義』・『毛詩正義』に散見する『世本』世系佚文の「A 生 B」の記述形式は疏文が連続的な世系情報を提示するための形式に過ぎないことを確認する。

第五章「三礼疏における『世本』の受容」は、礼学の学術的背景を意識した上で、『周礼注疏』・『儀礼注疏』・『礼記正義』における『世本』の受容状況を検討する。賈公彦の「二礼疏」は鄭玄注に厳密に対応し、その扱い方を踏襲した。一方、『礼記正義』は編纂の段階において複数の編纂者によって、礼学以外の要素も配慮され、『礼記』鄭玄注の春秋時代の世系説明の証拠として、『世本』の詳しい世系情報を提示していることを指摘する。また、『尚書正義』・『毛詩正義』と同様に、『礼記正義』にみえる「A 生 B」の書法は『世本』世系記載の固有の形式であった根拠はなく、連続的な世系情報を節略した上で提示する最も常用的な形式であることを確認した上で、「A 動詞 B」の書法は情報提示の最も簡潔な表現であり、世系記載に限らず、「A 作 B」・「A 居 B」を『世本』「作篇」・「居篇」固有の記述形式と断言することはできないという佚文の「記述形態」の本質を明らかにする。

第六章「春秋学における『世本』の受容」は、春秋学の学術的背景を意識した上で、「三伝」注・疏における『世本』受容を考察する。公羊学の議論の方向性をはじめ、後漢時代後期に成立した何休の『春秋公羊解詁』の傾向に鑑みれば、そもそも『世本』のような書物を必要としないことを指摘する。范寧の『穀梁伝集解』が既に『左伝』を参照しており、『穀梁疏』はその立場を継承しており、主に伝・注が附されていない経文に言及される人物を特定するために、否定することなく、認めた上で『世本』の記述を取り上げる傾向を明らかにする。宋忠からの影響が杜預・韋昭が『世本』を利用するきっかけであり、杜預・韋昭は後漢時代の学者と違って、『世本』「作」に対する関心を持っていなかった。それは「劉氏受命」が根幹となった讖緯思想の退潮によるものと指摘する。『左伝正義』は頻繁に『世本』の世系情報を用いるが、杜預注と一致しなければ、信用するに足らずと否定される。『左伝正義』に

みえる「A 生 B」の形の世系記載は他の四正義と同様に、疏文が『世本』の世系情報をまとめなおしたものである。第四・五章の考察結果を踏まえて、「A 生 B」の形式の世系記載は『世本』固有の記述形式ではなく、五経正義が編纂される際の、世系情報を提示する常用的な書法であったことを確認する。

結論では、第一～第六章の内容を整理した上で、本論文で確立した方法論、獲得された知見に基づき、『世本』をはじめとする佚書の散佚過程を、経学の変貌という視点から包括的に検討することを今後の課題として掲げる。

(論文審査の結果の要旨)

中国古代・中世の多くの文献は、10世紀のいわゆる唐宋変革期までに散佚した。清代になってこれら佚書の佚文を蒐輯する「輯佚」によって少なからぬ「輯本」が作成され、『漢魏遺書鈔』『玉函山房輯佚書』『黃氏逸書考』といった大部の叢書が刊行された。『漢書』芸文志に「古の史官 黄帝より以来 春秋の時に訖ぶまでの諸侯大夫を記す」と見える『世本』はそうした佚書の一つであり、最も精密な茆泮林輯本は、帝王世本・諸侯世本・卿大夫世本・世本氏姓篇・世本作篇・世本居篇・世本諡法篇の構成を採る。21世紀に入るところから中国古典 DB の普及により、従来気づかれなかった佚文が発見されつつある。

輯佚は一般に個々の佚文を原文の一部とみなして輯本を編集するが、『世本』の佚文は後漢から南宋、2世紀から12世紀の長期間にわたる諸文献に引用されて今日に遺されたものである。引用にともなう原文の改変は当然予測されるが、従来の輯佚はこれを等閑視し、また『世本』を用いた研究は、既成の輯本を起点として進められてきた。近年、伝統的な輯佚に対し疑義が呈されつつあるが、本論文もまた、同様の批判的見地から、そもそも『世本』が諸文献においてどのように引用され、その結果佚文として遺るに至ったのか、という問題を設定し、その第一の作業として、前漢末から唐初、前1世紀から7世紀における経学史における『世本』引用の実態を丹念に追究したものである。

本論文の成果は、第一に、唐初の経学における『世本』引用の実態を網羅的に分析したことにあろう。〈第四章 『世本』世系佚文をめぐる考察—『詩』・『書』・『易』正義篇—〉〈第五章 「三礼疏」における『世本』の受容〉〈第六章 春秋学における『世本』の受容〉においては、『五経正義』に収められた『周易』『尚書』『毛詩』『礼記』『左伝』および『周礼』『儀礼』『公羊伝』『穀梁伝』の「九経」の疏のうち、『毛詩正義』13件・『尚書正義』23件・『周礼疏』9件・『儀礼疏』1件・『礼記正義』46件・『穀梁伝疏』16件・『左伝正義』87件、都合195件に及ぶ『世本』引用例が分析される。この歴大な作業の結果、従来、『世本』原文の定型的書式とみなされてきた「A生B」「A作B」が、実は疏において『世本』の情報を提示する際の形式であったことを提起する。

第二の成果は、『世本』に焦点を当てることによって、前漢末～唐初の経学史において、従来十分には意識されていなかった脈絡を剔出しえたことであろう。〈第一章 『世本』受容前史〉〈第二章 後漢訓詁学における『世本』の受容〉〈第三章 『世本』宋忠注をめぐる〉においては、前漢末～後漢における『世本』の引用が分析される。論点は多岐にわたるが、とりわけ応劭の『漢書』注における『世本』の引用が、のちの史記学における『世本』利用の端緒となったこと、宋忠の『世本』注が、韋昭の『国語』注、杜預の『左伝』注における『世本』利用の端緒となったことの指摘はとりわけ重要であろう。また、唐初の疏を扱った第四～第六章において、疏の前

提となった『周易』王弼注、『尚書』『毛詩』『左伝』の劉炫義疏などの『世本』に対する姿勢が、経文の内容と相まって疏の『世本』引用を制約するという指摘も重要である。

問題提起的な作品であるため、本論文の功績は十二分に評価するものの、なお要望すべき点も少なくない。望蜀の誹りを顧みず敢えて申し述べる。

第一は、『世本』引用例の認定についてである。論者は、茆泮林輯本に倣って、引用の際に『世本』を明示した事例に限定して分析を進める。謹厳な姿勢として評価したい。その結果、後漢時代において『世本』を明示する引用例が、一般には『世本』の中心とみなされている帝王世本・諸侯世本・卿大夫世本などの系譜ではなく、世本作篇に集中していることを発見し、また経学において『世本』を明示する引用例の初見が後漢末に降ることを指摘する。まことに重要な知見だが、その一方で、とりわけ後漢～唐初における引用がその引用元を必ずしも明示しないことをも考慮すべきであろう。『世本』を明示しない引用例の存在を想定し、その実例を説得的に提示することは簡単ではないが不可能ではない。その結果、経学の『世本』引用に関するより立体的な議論が可能だったはずである。

第二は、前漢末～唐初の経学史全般に関してである。論者はとりわけ今文章句の学から古文訓詁の学へというステレオタイプな理解には全面的には賛同しないとのことだが、表現力の不足もあってその点が十分に伝わらない。これに限らず断定的な口調が散見するが、それぞれより丁寧な説明を試みるべきであったであろう。さらに経学史の個々の状況について、先行研究にもっぱら依存する部分が散見する。折角の実証的作業を十分に活用し、論者独自の視点から経学史の全体的推移を再構築することが可能でもあり必要でもあったかと感じる。

第三は、『世本』の受容を考える場合、おそらく経学以上に『史記』『漢書』など史学分野の状況が重要であることである。『世本』引用の件数としてはおそらく経学分野を遥かに凌駕するはずであり、『世本』受容史を包括的に理解するには不可欠な作業であると考えられる。

論者は中国古代中世の学術全般に広く関心をもち、決して『世本』のみに踟躕するわけではないが、今後の研究において上記の要望に応じていただけることを確信するものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2021年2月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。